

## COP24 サイドイベントについて

1. 開催日時 12月12日(水) 13:15-14:45 (ポーランド・カトヴィツェ)
2. 会場名 Narew (COP24 オフィシャルサイドイベント会場 (100名強参加))
3. イベント概要
  - プログラム名 : Progressive practice on quantifying the avoided emissions
  - 経産省殿、経団連殿との共催
  - 狙い : CO<sub>2</sub> の排出削減を図るためには1国内において取り組むのではなく、国境を越えたバリューチェーン全体かつライフサイクルの観点で検討することの重要性を、政府機関、企業連合、産業組織、個別企業での取りくみを通じて再確認すること
  - ファシリテーター : 稲葉 敦 工学院大学 教授 (日本 LCA 学会)

### 4. プログラム

#### (1) 開会挨拶

- 杉森 務 経団連 副会長・環境安全委員長 (JXTG HD 社長)

#### (2) 各国・国内外企業の取組事例の紹介 <各 5-10 分>

##### ① 経団連の取組 ; 手塚 宏之氏 (経団連)

(主な内容)

- ・地球温暖化は世界全体で考えるべき問題であり、1国内で解決できない。企業は GHG 排出削減に関して、そのグローバルバリューチェーン全体での貢献が可能であり、その際材料、部品、製品、サービスにいたるライフサイクル全体に注目すべきである。
- ・経団連ではグローバルバリューチェーンを通じた GHG 削減について「ガイドライン」を作成して参加企業へ呼びかけている。
- ・例えばボイラー用耐熱高強度鋼管は従来型の耐熱鋼管よりも更に高温域に耐えるものとし発電設備の発電効率の向上を実現し、輸出部門においても CO 排出量削減効果を得ることが可能となった。

##### ② フランス政府の取組 ; Romain POIVET 氏 (フランス環境・エネルギー管理庁)

(主な内容)

- ・フランスでは 2010 年、2015 年に GHG 排出削減に関する報告義務について法制化し、それに伴い、削減貢献のガイド文書を作成した。
- ・そこでは GHG 削減を定量化する仕組みが取り入れられ、削減取り組みに関する信頼性指数 (Confidence Index) による 3 段階評価を実施している。

- ・その際、企業外、企業内とのコミュニケーションや意思決定プロセスへの取り込み度合いを評価の対象としている。
- ・この手法の活用により企業の意思決定は GHG 削減と関連するようになり、その取り組みを監視測定が可能となり、その結果について信頼性を得ることができるようになった。
- ・例えばヨード液の容器製造については、本ガイドラインを活用して 12%の GHG 削減が実現した。

③ 産業組織の取組 ; Tara Nitz 氏 (国際化学工業協会協議会 (ICCA))

(主な内容)

- ・ICCA (国際化学工業協会協議会) では、化学製品は様々な産業において材料を提供しているため、ライフサイクルでの削減効果に関して定量化に取り組んでいる。
- ・定量化をすることで、各個の取り組みや結果についての透明性が確保されるためであり、その際 MRV (Measurable, Repotable, Verifiable) を基本コンセプトとして、ガイドラインを策定した。
- ・MRV の観点を伴う、ライフサイクルアセスメント (LCA) は意思決定に不可欠であるべきで、意思決定プロセスに取り込むことにより GHG 削減達成も可能となる。

④ 日本企業の取組 ; 三浦 仁美 氏 (積水化学工業)

(主な内容)

- ・積水化学は「環境持続性ビジョン」として 2030 年に現在、企業活動に活用している自然資本のリターンを 2030 年に 100%以上とする (環境貢献製品の開発や自然保護等の活用等で、“地球から授かったもの以上に地球に返していく”)。
- ・その評価に際して、環境持続性指数を用いて、その目標に向かってどのように進捗しているかを検討することとしている。
- ・この指数は主に GHG エミッションに関するものであり、さらに当社の世界規模の活動に関してはグローバルバリューチェーンに関して LCA メソッドを用いて評価している。
- ・この計測や測定を通じて重要なことは
  - ① グローバルバリューチェーン全体での取り組みの重要性を認識すること
  - ② 研究開発部門を取り込むこと
  - ③ その成果を当社 2050 年のヴィジョンや持続可能な目標 (SDG s) へ活用すること

である。

⑤ 海外企業の取組 ; Hans-Jorn Weddige 氏 (ThyssenKrupp)

(主な内容)

- ・一般に GHG 排出については、企業単体の活動に注目することが多いが、実は 90%が製品や技術サービス (企業の外部プロセスから) から排出されていること、すなわち顧客による排出が多いということであり、また、
  - ① バリューチェーンの観点から評価するとネットの CO<sub>2</sub> 量が観測できる

- ② ライフルサイクルの観点から考えると CO<sub>2</sub> が再利用されるようなバリューチェーンでは (新たな) 価値を生み出す
- ③ 生産したものの (さらなる) 製品が CO<sub>2</sub> の削減に役立つ (例えば水力発電機による H<sub>2</sub> が生産されるとその H<sub>2</sub> を火力の代替電源として活用する)

といった面があることを認識すべきである。

(3) パネルディスカッション <30分程度>

全体としては、GHG ガスの定量化や削減量の計算方法や LCA のガイドラインが全世界的に整備されつつある中で、この成果を各企業等でどのように活用していくのかを念頭に議論が行われた。主な論点や内容は以下の通り。

- ・ 積水化学での活用例や戦略
- ・ フランスでの政策導入時の、政府と企業、企業内等のコミュニケーションの重要性
- ・ GHG 排出についての産業間での軋轢解消への取り組み
- ・ 経団連による GHG 削減に関する取り組み事例の展開

そして、パネリストからこのような取り組みに最も大切ことをかかげてもらったところ、経営管理手法として活用するための削減量定量化、信頼性を得るための透明化や測定における共通の尺度、コミュニケーション、共通尺度と実効的なモニタリング等について言及があった。

(4) 閉会

以上



COP24 全景



経団連 杉森副会長



司会 GISPRI 前川



サイドイベント登壇者 (左端 ; 稲葉先生)



手塚氏 (経団連)



POIVET 氏 (フランス環境・エネルギー管理庁)



三浦氏 (積水化学)



Weddige 氏 (ThyssenKrupp)



会場の様子 (1)



会場の様子 (2)



会場の様子 (3)



懇親会会場